

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 人間コミュニケーション学科

講師 高田 毅

1. 教育の責任

2018 年に初めての公認心理師国家試験が行われた。臨床心理士という民間資格から公認心理師という国家資格への進展である。移行措置を経て、健康科学大学人間コミュニケーション学科でも、公認心理師の学部養成を担うことになった。ここでの目的は公認心理師の養成である。山梨県における学部養成を行っている大学は本学と山梨英和大学の 2 校のみであり、山梨英和大学は大学院養成も行なっている。大学院養成を行っていないという本学においての弱点を克服するためには、それを補いうる学部教育内容が求められる。本学で公認心理師を目指すということは、ほぼ必然的に他大学の大学院入試に合格することが必要である。そこまでを見据えた公認心理師の学部養成を考えていく必要がある。

一方で、人間コミュニケーション学科は、福祉系資格を志望する学生、資格を目指さず 4 年間を通して人間的成長を遂げ民間企業へと就職していく学生もいる。よって、心理・福祉の専門家育成のみならず、青年期の発達課題を促進する教育も目的の 1 つとなる。心理学は発達課題を直接扱い、また、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する、のような人間の精神機能そのものを扱う学問でもある。これらはコミュニケーション能力という第三次産業で求められる基礎力に直結している。良き市民としての基礎を育てていく教育ともなるであろう。こうした内容を提供しながら、同時に個別対応を積み重ね、一人ひとりの成長、発達に貢献することが求められている。これは、公認心理師の学部養成に関しても同様であると考えられる。

私は健康科学部の人間コミュニケーション学科の教員として、心理学の専門科目を中心に担当している。過去 2 年間の担当と授業科目は以下のとおりである。各授業のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

主要な担当科目は、公認心理師・臨床心理士に関する専門科目となっている。その他、3 年生・4 年生の演習（ゼミ）、精神医学のような心理学の近接領域、初年次教育に関する科目を担当している。

2021 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	1 年前期	必修	13
基礎演習Ⅱ	1 年後期	必修	14
高齢者心理学	3 年/4 年後期	選択	4
社会心理学	2 年/3 年/4	選択	25

	年後期		
精神疾患とその治療Ⅰ	2年/3年/4 年前期	必修/選択	36
精神疾患とその治療Ⅱ	2年/3年後 期	必修/選択	46
社会・集団・家族心理学	1年後期	必修	28
人格心理学	2年/3年/4 年前期	選択	11
心理アセスメント法	2年/3年/4 年前期	必修/選択	17
福祉心理学専門演習Ⅰ	3年前期	必修	2
福祉心理学専門演習Ⅱ	3年後期	必修	4
福祉心理学専門演習Ⅲ	4年前期	必修	5
福祉心理学専門演習Ⅲ	4年前期	必修	1
福祉心理学専門演習Ⅳ	4年後期	必修	5
福祉心理学専門演習Ⅳ	4年後期	必修	1

2022 年度

科目名	時期		受講者
基礎演習Ⅰ	1年前期	必修	13
基礎演習Ⅱ	1年/2年後 期	必修	11
ホスピタリティコミュニケーション	1年後期	選択必修	31
社会心理学	2年/3年後 期	選択	6
精神医学と精神医療A（精神 疾患とその治療1）	2年後期	必修	27
精神疾患とその治療Ⅰ	3年後期	必修	3
精神疾患とその治療Ⅱ	3年前期	必修	1
社会・集団・家族心理学	1年/2年後 期	必修	34
卒業研究	4年通年	選択	2
心理アセスメント法	3年前期	必修	4
福祉心理学専門演習Ⅰ	3年前期	必修	3
福祉心理学専門演習Ⅱ	3年後期	必修	6

福祉心理学専門演習Ⅲ	4 年前期	必修	5
福祉心理学専門演習Ⅳ	4 年後期	必修	5
コミュニケーション演習	2 年後期	選択	1

・授業外活動

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 健康科学大学リハビリテーションクリニック 心理士
- 2) PAS 心理教育研究所 研究員
- 3) 福島復興・心理教育臨床センター 臨床スタッフ（通年）
- 4) 学生・就職・卒後教育委員会委員

1)に関しては、発達障害のリハビリテーションの一環としての親・子どもへの心理面接を行っている。実際には発達障害に限らず不登校などさまざまな事例への対応を行っている。これらの体験は授業における現場の実際を伝えるための基礎となっている。

2)に関しては、大学外の研究所に所属することにより、最新の臨床技術や研究などに触れ、実践する機会となっている。また、心理療法実施機関でもあり、前述の親・子どもに限らず、成人や大学生など幅広いクライアント群と接する機会となっている。

3)に関しては、東日本大震災の震災支援を継続している体験からストレス反応や PTSD の臨床について、具体的に伝えるための基礎となっている。また、一般市民に心理学を伝える機会ともなっており、それは、大学生に一から心理学を伝えていく技術にも応用されている。

2. 教育の理念・目的

本学は、様々な総合的問題に立ち向かうことができる問題解決力を備えた人材」を養成するため、「豊かな人間力」、「専門的な知識・技術力」、「開かれた共創力」の三つの教育目標を掲げている。

心理学を学ぶことにおいては、自らの体験と理論を繋いで体験的に理解できるようにすることを意識している。また、クリティカルシンキング（批判的思考）は主体的な学びの鍵となる。主張と根拠の対応を意識すること、自分で自分を客観的に振り返ること、思考の目的を意識することを刺激していきたい。そして自らの体験の表現力を磨き、目的にあった形で使えるようにすることを教育の中心に据えている。

- 1) 一人ひとりの体験から心理学理論を学び、自己理解が深まるように伝える

心理学を学ぶことで人間の理解が深まる。心理職はその理解を用いて心理的支援を行う。

「専門的な知識・技術力」の根幹となる部分である。心理専門家を目指す学生以外の学

生においても、社会に出るにあたって自己理解・分析は必須のものとなっている。就職先とのマッチングのための必要な要素であるからである。心理学理論で一人ひとりの体験の理解を豊かにしていくことで自己理解が促進される。それは「豊かな人間力」を育むものとなる。それは就職活動などの社会に出る上での基礎となる。

2) 自らの体験を最大限に活用できる存在感のある心理士の養成

心理士は自らの体験を心理面接に応用できる必要がある。そのためには前述の自己理解はもちろんのこと、自己理解や自らの体験を人前で表現できる力を身につける必要がある。それは「開かれた共創力」の基礎となる。専門家としての言葉が表現され伝わるものが存在感となる。心理士教育では、傾聴が過度に重要視されるがゆえに、存在感を消すことがあたかも良いことのような錯覚がある。しかし、存在感がない専門家には相談者も頼ることが難しくなる。存在感を出しながら専門性を発揮できる心理士の養成は大学院での現場実習や現場での実践の基礎力となる。

3. 教育の方法

大学生活のあらゆることは、貴重な体験の機会になりうる。大学行事などについてもモチベーションを刺激しつつ体験を増やせるように関わっていききたい。また学習を促進する意味でも、体験をフィードバックして意味づけができるように手伝っていく。

近年アルバイトなど社会に出ることへのハードルが高い学生が散見される。そのような学生にも社会経験を早めに積む機会が作れるように促していききたい。就職活動がインターンシップの早期化に伴い前倒しする傾向にある。それを踏まえて社会との接点は常に意識しておきたい。

・授業の導入としてのディスカッション（Teams 授業での擬似ディスカッション）

どの授業でも、授業の最初にウォーミングアップの時間を設け、ディスカッションのお題を提示する。ディスカッションのお題は授業内容に関連して、誰でも発言がしやすいようなお題を選ぶようにする。その意見を集約しながら、残りの授業時間で解説するというスタイルで授業を展開している。こうすることで自分の考えや身近な体験が心理学理論とどのようにつながるかが体験的に理解しやすくなる。また、他者の意見に触れることにもなり、それが学生の視野を広げることにもつながる。

ただし、ディスカッションにはハードルの高さを感じる学生も多い。そのため、安全感を体験してもらうことなどのディスカッションの技術を伝えていくことも必要である。この体験は、就職活動などの表現が求められる場面、専門職としての能動的な関わりの練習機会にもなる。

Teams 授業では、ディスカッションのお題を設定して、学生に返信欄にコメントを返し

てもらふ形で擬似ディスカッションを行う。そのコメントに解説を加えながら授業を展開していく。Teams 授業の擬似ディスカッションは対面授業のディスカッション以上に多様な他者の意見に触れることが可能となる。



・公表事例や架空事例を活用したディスカッション

上述の通り、ここは目に見えないため、話が抽象論になりがちである。それを打破するためには、具体性を持った話をする必要がある。相談援助の場面では事例を提示することが具体性を確保するいちばんの方法となる。事例を使うことで現場の臨場感や実際のジレンマが学生にも伝わりやすくなる。また、事例から学ぶことによって、自らの日常生活にどう応用するのかもイメージしやすくなるメリットがある。

・コメントシートでの表現の練習

授業の最後にコメントシートを書くことを求めている。「具体的に丁寧に書くこと」を徹底している。これは、授業の理解度をコメントシートの記述の具体性で推し量ることが可能になるという理由もあるが、具体的に丁寧に書くことを練習し、表現力を養う機会として設定している。これは、就職活動における履歴書などのような自らを表現する書類を書くことの練習にもなる。表現力は一朝一夕に身につくものではない。それゆえ普段の授業のコメントシートから練習を積み重ねフィードバックを返すことで少しずつ磨くことが可能となる。

4. 教育の成果・評価

FD 委員会によって実施されている授業評価アンケートを活用して、授業内容の反省点を振り返り、改善に活かすことができる。また、実際の授業内容についても、項目毎に分析を行い、コメントの内容とともに、次年度のシラバスや授業内容に活かしている。

・社会・集団・家族心理学

この授業は、人間コミュニケーション学科1年生の必修であり、他学科学生も受講可能な専門基礎科目である。入門科目であるので、前提知識がなくても理解できるような授業展開を意識している。また、日常生活とも密接に関わる内容なので、日常生活と理論のつながりを意識して体験的に理解できるようにディスカッションを意識して行った。

全体的な評価は 4.5 であり、平均程度の評価を得ることができた。「他学年の学生の意見や、さまざまな意見を聞くことができて楽しかった」「周囲の友達と意見の共有ができてよかった。身近なところに心理学が隠れていることに気がついた」など、ディスカッションとその意見の共有から展開する授業スタイルは、受講生から一定の好評を得

られている。ディスカッションの意図も学生に伝わっていることが読み取れる。

一方で、「リアクションペーパーを記入する時間が短くなった時は、具体的なことを書くのは難しいので、評価する際に少し配慮してほしい」といったコメントもあった。コメントシートで「具体的、丁寧に」を求めることは学生に対して負担になっている部分も否めない。コメントシートを書く時間を確保するのは教員側の責任である。コメントシートを書く時間を確保するのが第一になされるべきことであるし、それに失敗した時には、学生のプレッシャーにならないようなフォローを丁寧にする必要がある。

・精神疾患とその治療 II

この授業は、精神保健福祉士コースと発達臨床心理コースの必修の専門科目であり、精神保健福祉士の資格要件科目である。精神医学の中でも精神病理学を広く扱う専門科目であり、重要項目が多い科目であった。精神病理学とはいえ、健康な部分と異常な部分には連続性がある。それを踏まえて日常の体験と繋げて理解できるように Teams の擬似ディスカッションを組み立てた。

全体的な評価は 4.5 であり、平均程度の評価を得ることができた。「先生のお話は理解しやすかったです。ありがとうございました」「チャット機能を最大限に活用したり、リアクションペーパーへのフィードバックが早かったりと、オンライン授業であったものの学生にとって学びやすい環境が作られていた。ためになる授業をありがとうございました。」と Teams 授業ではあったが、擬似ディスカッションを活かして日常体験と精神病理学を繋いで理解する試みは一定程度成功したと考えられる。一方で、「難しかった」「より具体性のある疾患の中身や両方の特徴が登場してきて難しかったが、濃い内容で興味深かった」と難しいという声も散見された。扱う項目が多いために説明が簡潔になりすぎたことも一因と考えられる。補足資料を用意するなど、授業時間外で対応する工夫も必要になると考えられる。

レポート課題に関しては、学生に負担をかけすぎてしまったことは反省点である。「レポートに使用する資料の配布がなく、(中略)先生から配布していただいた資料をもとにレポートを提出させるべきだと思いました」。この学年は Covid-19 で登校授業が難しかった学年であり、図書館の活用をこの機会に学ぶことを意図して設定した。しかし、実際には少ない資料の学生間の取り合いとなってしまう、負担をかけてしまう結果となった。レポート課題に関しては、学生が無理なく取り組み、かつ自主的な学びを刺激できるような適切な内容を組み立てることが課題と考えられる。

5. 今後の目標

短期目標：授業評価内容の改善。特にコメントシートとレポートに関して。

授業の構成や展開に関しては概ね意図通りに展開できている。一方、上述の通り、表

現力の向上も意図して、コメントシートやレポートの出題を行なっているが、過大な学生への負担になっていることは反省点である。レポートの出題に関しても無理なく取り組めるような課題内容を設定することは今後の課題である。また、入学者が多様化し、学生の質も多様化している。それも踏まえて、頑張ったらなんとかできたという難易度の課題を設定できるように試行錯誤したい。

長期目標：実力ある心理士の養成及び表現力のある社会人の育成

本学の公認心理師養成はまだ始まったばかりであり、完成年度に達していない。上述の通り大学院への合格が大きな関門になる以上、入学当初から大学院を意識した教育、さらには、自ら専門分野で学びを続けられるための心理士としての基礎力を育成できる指導力を身につけていきたい。そのために自己を批判的に振り返り、それを踏まえて自己成長できるような心理士養成を目指したい。

これは、社会人の養成においても同じことが言える。表現力や自ら自己を批判的に振り返り、それを踏まえて自己成長できるような学生を育てていきたい。そのためのきっかけと方法を伝えられるよう、指導していきたいと考えている。